

「異邦人との共生」

第1次モロッコ地震災害ボランティア報告(2023年11月7日-15日)

(社)神戸国際支縁機構 岩村 義雄
「カヨ子基金」代表 佐々木美和

主題聖句: コロサイ信徒への手紙 3章 11節「そこには、もはやギリシア人とユダヤ人、割礼のある者とない者、未開の人、スキタイ人、奴隷、自由人の違いはありません。キリストがすべてであり、すべてのものの内におられるのです」(『聖書協会共同訳』)。

<序>

2023年9月8日23時11分¹、モロッコ国大都市マラケシュの南西約70kmにあるアトラス山脈のアルハウズ県を震源とするマグニチュード(M)6.8の大地震が発生。マラケシュは、高アトラス山脈の北麓に位置する都市である。被災は特定地域に集中した。9月8日(金曜日)夜、強い揺れがあり、モロッコ内務省によれば2,900人超が死亡。国王モハメド6世が陸路と空路で人道支援を実施するよう命じた(国営マグレブ・アラブ通信 MAP)。がれきの下からうめき声が聞こえる。路上に放り出された人にとり、昼夜の温度差が大きく、夜は寒さにふるえる。観光都市マラケシュから約40km離れたアセルダ村(30人が死亡)へ近づこうにも道が寸断されている。毛布、温かい食事、医薬品が不足していた。

2023年11月7日～11月15日、(社)神戸国際支縁機構および国際部「カヨ子基金」は、中国の格安航空券を利用して3回乗り換え、ロンドンを経由して、約45時間かけて被災地へと向かった。地震被害のモロッコに孤児の家を建てるためであった。第1次モロッコ・ボランティアを敢行、首都マラケシュに降り立ち、震源地のアルハウズ県へ向かった。



アスニ 2023年11月9日 マロイ・ブラヒムにて

¹ 9月9日午前7時11分 JST[Japan Standard Time 日本の標準時間]。

11月8日(二日目), アスニから激震のアトラス山脈, イルブール El bour に向かった。7歳の一人息子を亡くした未亡人ハビバ・アイツアレムさん(25歳)と出会った。彼女は息子を地震で亡くしていた。筆者らも共に涙を流した。すると彼女の顔の口元に笑みが浮かんだ。「だいじょうぶよ」と言いながら筆者美和の肩をなでてくれた。彼女は「私は物質的なもの, お金には興味がありません」と。地震の辛い思いを吐露した。彼女自身に孤児たちの世話をしてもよいという気持ちが高まってきた。

今回のレポートはモロッコの人々との出会い, 孤児たちの家, 「カヨコ・チルドレン・ホーム」建設に向けて, 道が開けた報告である。

目次

(1) 声の芸術アザーンが響き渡る

- a. 音から見えるモロッコ 3
- b. モロッコは王国 5
- c. 雨期に入り, 凍てつく寒さ 6

(2) 親切なモロッコ人

- a. やさしさをもつ人々との出会い 6
- b. 経典の民 7
- c. 異邦人とは?ベルベル人とは? 8

(3) 孤児たちの呻き

- a. 山間部に踏み行く 10
- b. 凄惨な傷跡 11
- c. 「カヨコ・チルドレン・ホーム」への糸口 14



モロッコの北は地中海, 南にはアフリカ大陸の三分の一を占めるサハラ砂漠。モロッコの砂漠は赤砂が特徴である。

(1) 声の芸術アザーンが響き渡る

a. 音から見えるモロッコ

モロッコはアトラス山脈に代表される峰々に囲まれる土地である。見上げれば畏敬の念を抱かせる峻厳な嶺が広がる。日本でかつてよく見られた公衆銭湯に描かれている富士山のような姿である。絵に描いたかいたように影を作る尾根、山麓から、空へ吸い込まれるようにそびえ立つ頂。

ステップ気候で乾燥する空気と霧の中、夜明け前6時にアザーンが流れる。モスクのミナレット(塔)の上からではなく、肉声で独りで唱える。アスニだけでも3つのモスクは地震で倒壊し、復旧していなかった。アザーンとはイスラーム教徒が祈ることを促すために唱えられると現地で聞いた。一日に3回、「アッラーフ・アクバル(アラーは偉大なり)」の出だしは、アラビア語で響きわたる。イスラーム教徒ではない日本人ですら、郷愁を感じる。キリスト教のディボーション²に相当する。

90年以上、大きな地震がなかったモロッコでは、ミレット(尖塔)も倒壊した。アザーンはふだんはミレットの上から、村、町中に発せられて唱えられたりする。しかし、私たちが行ったアスニでも、地上から発していたようだ。朝日もまだ顔を出しきっていない。鶏が高らかに声をあげる。呼応するようにあちこちで鶏同士の応答がある。朝日が家を失った避難者のテント村に差し込む。キリストを乗せたロバが、憂いを帯びた瞳で見つめ返してくれたと思いハッとした。モロッコ人の軒先でロバを見かける。それは、荷物を運ぶために日常的に使われる。車が駐車場に停車しているように、市場(スーク)に行けばロバのたまり場に出くわす。ロバが市場のそばの川の流れて水を飲む。観光国の首都マラケシュでは道路に馬が闊歩し、らくだが草をはむ。人間だけの世界ではない、動物や木々、太陽、風が語りかける空間がある。子どもたちは、擦り切れた服が砂ぼこりだらけだ。擦り切れたボロボロの紐を器用につないでいる。縄跳びにして時間を忘れて跳び跳ねている。



縄跳びを興じるファティアザールさん
アスニ 2023年11月9日

² 朝目覚めると、「我と汝」の関係において、あるキリスト教徒たちは聖書を読み、神との祈りの関係を築き、聖性の時をもつこと。

筆者岩村は、兵庫教育大学の水野信男名誉教授[1937-]に、2004年1月8日～2月5日、合計600分、神戸バイブル・ハウスにおいて、アフリカ・中東音楽についての講義を依頼したことがある。水野先生は、アラブ遊牧民の「カシーダ」³について、現地で採取された音源を聞かせてくださった。水野先生は、その著作『中東・北アフリカの音を聴く』⁴において、モロッコの民族音楽を訪ねられて、ベルベル人のラーイス(複数形・総称はルウェイス、遊歴楽人＝詩人兼歌い手)や、アトラス山脈のベルベル人の「アホワーシュ」、「アヒッドゥース」という男女のラインダンスについて詳述しておられる⁴。あの反復の音楽の旋律はいつまでも心の響きとなって残っている。モロッコ滞在の最終日に催された結婚式に招待された時、聴く機会があった。

b. モロッコは王国

モロッコの現国王ムハンマド6世は人気が高い方である。

民衆のために福祉や医療制度などを充実してくれた憐れみ深い王という印象があるようだ。王は地中海沿岸の首都ラバトの王宮に居住されている。アフリカで正式に王制なのはモロッコだけである。筆者は2019年6月3日、ガーナ国ワ・ナ宮殿に集まった11地域の長官を束ねられるフセイン・セイドウ・ペルプオ4世[1950年2月28日生]という王にお目通りがなかったことがあった⁵。ガーナでは、ワだけでなく王が地域毎にいる。現在のモロッコでは、初等、中等、高等教育において公的また私的な教育機関が存在する。モロッコの公用語はアラビア語と後述するアマジグ語(ベルベル語)である。



モロッコの現国王ムハンマド6世(1963年生 在位:1999年7月23日-現在)

歴史的に地中海を挟んだヨーロッパ諸国とのつながりが深い。そのため、モロッコ人の多くはフランス語、スペイン語、英語も話す。アラビア語、フランス語を中心とした言語で学ぶことができる。民衆の言語の印象としては、かつて中心的な言語のひとつであったフランス語はだんだんと影を潜め、英語がより強くなっている(11月10日、22歳地元住民看護師談)。公的教育機関を選べば、大学を含めた高等教育まで無償で教育を受けることができる。それでも、マラケシュまで通う交通費をねん出することが困難な場合もある。大学在籍中に必要な登録費用や、大学に通うにあたり、必要な交通費や家屋の賃貸費用などは個人負担となり、公的に賄われることはない。

11月9日にマラケシュ・メナラ空港に降り立った。都会の地元民は観光客慣れしている印象を受けた。空港の案内、売店、カウンターの人々は機械的に対応する。初めてモロッコの地に降り立った筆者らにとって、思いがけない失敗をした。行き先を間違えた。目的の山間地に行こうとしているにもかかわらず、ジャマ・エル・フナ広場まで行く羽目になった。広場は昔も今も変わることはない。大道芸人がたむろしている。蛇使い、アクロバットの演技、民族楽器の合奏団など、ボランティアでなく、旅行ならば楽しめる観光地の名所である。支払ったバス代は返ってこない。行き先が山岳地帯のせいか、どなたに尋ねても説明できない。肩をすくめる地元民より、海外からの観光客も気の毒

³ カシーダは数十行からなる長詩で、各行は同一の韻律と同一の脚韻をもつ。また各行は、前半句(A)+後半句(B)に分かれ、かつてはふたりで、交互に半句ずつ、つまりABという対句が、交唱ふうにかわされたようだ。ちなみに聖書の詩編もこの形式である。

⁴ 『中東・北アフリカの音を聴く』(水野信男 スタイルノート 2008年 132-137頁)。

⁵ ワ・ナ宮殿は一年に一度ガーナの大統領も謁見に見える式典がある。筆者も招かれたが、コロナ禍のため出席できなかった。
<https://kisokobe.sub.jp/%E6%B5%B7%E5%A4%96%E3%83%9C%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%83%86%E3%82%A3%E3%82%A2/15427/>

そんな顔をしている。足を踏み入れたことがないから肩をすくめている。出会う人に片っ端からアスニへ行く方法を尋ねるがだれも知らない。感謝なことは観光都市なのに、お金の無心をされることがないことだろう。ストリート・チルドレン、「物乞い」の人たちががまどわりつくこともなかった。目的地にたどりついてわかったことだが、バスは毎日の便がない。飛行場の案内部門も精通していなかった。海外でそんなハプニングにめげていると、前へ進めない。バス停で待っておられた年配女性が、長距離バス乗り場を教えてくださいました。インターネット会社の氏名カードを下げた営業中の青年2人がバスでは行けないので、現地まで私たちを乗せてくれる車の運転手に交渉してくれた。親切な若者との出会いによって、猛暑の中、山間部へ予定時間を2時間遅れてようやく出発することができた。

暑さも日本の湿気の夏と違い乾燥した暑さであった。

c. 雨期に入り、凍てつく寒さ

都会マラケシュと異なり、いくつもの急カーブを経て、対向車とすれ違う度に身体を緊張させながら、山並みを進んだ。身ぐるみ剥がされて山中に取り残されたらどうしようか、とありもしない余計な想像をしているうちに、視界に入ってくる場面に生唾を飲んだ。驚いたことに見渡す限りの家々は損壊している。日差しも^{かげ}翳り、温度は低くなり、別世界に入ってしまった。家を失い外に放り出された人たちはどうやり過ごしているのか、寝る場所はあるのだろうか、病院もなくなっている、負傷者はどうしているのかと色々と考えながらユニスに到着した。すると店をもたない年配の人が「銀だ。買わないか。安くしておく」と車から降りようとするブレスレットを販売に寄ってきた。迎えに来たモハメドさんがまるで自分の頭にまどわりつくハエを追い払うように断り、笑顔で私たちに付いてくるように言われた。しかし、どこもかしこも地震で破壊され、まともな建物はない。裸足の子どもたちが東洋人を見たことがないのか、しきりにこちらを見ている。笑顔を見せると、歓声をあげた。子どもは純粹だ。



さらに坂道を登り、門、塀、入口が空爆されたかのようなところに、入るように言われた。道は砂で覆われている。傾斜が35度ほどあるため、足がすべりそうになる。内心、また騙されるのか、と不安がよぎった。取り越し苦労だった。庭にあるテーブルと椅子に座ると、温かいチャイでもてなされた。お茶の注ぎ方が洗練されていた。戦場で口にふくむような一期一会の緊張はなかった。

モハメドさん夫婦の思いやりが所作によって伝わり、45時間以上の旅の疲れがいやされた。

(2) 親切なモロッコ人

a. やさしさをもつ人々との出会い

飛行場では、サンドイッチ一つが約 1000 円もする。そのように観光慣れした物価の高い地でも、イスラムの善行を行おうとする若者と出会ったことだ。アビールさんという 26 歳の女性は、大学の休みの合間に旅行に行くのか、スーツケースを下げて急いでおられた。筆者らと落ち着いてフランス語で言葉を交わして下さった。筆者らが地震被害の場所にボランティアに来たことを告げると、携帯を取り出し、地元でよく使われるいくつかの SNS の一つ、イスラエル発の「WhatsApp」(ワッツアップ)を交換した。彼女自身も、9 月の地震以降、被災した山間部に赴き喜捨⁶をしたという。モロッコはこれから雨季になり寒くなる。だから被災地はさらに大変で助けが必要だと筆者らに助言して下さった。

モロッコの国は観光収入が 10%、年間数百万人が観光に訪れる。しかし、アビールさんのような心根のやさしいモロッコ人に最初に親しくなれたことはさいわいであった。



アビールさん 2023 年 11 月 9 日

到着後、まず、震源地のアセルダ村のアスニに向かおうとした。山間部にあるモハメドさん家族が震災前まで宿泊できるロッジを開いておられた所である。ボランティア道は飛行機のトランジットの乗り換え時間が 12 時間を越えても、ホテルなどに宿泊することはない。空港で時間をつぶす。爪に火を灯すような高齢者からの献金を 1 円でも無駄にしたくないからである。何が自分を変えてきたのか。

江戸時代の俳人松尾芭蕉[1644-1694]は「^{こも}薦を着る生活」を目指した。筆者は思春期の時、芭蕉の生きる姿にあこがれた。単独登山に出たことも一度や二度ではなかった。しかし、世の空気を吸ったことにより、人に使われるより、使う側に立ちたいという欲を捨てきれなかった。アッシジのフランチェスコ[1182-1226]こそ富んだ生き方と頭でわかっている、衣食住の安定を求めてしまった。宗教に身をやつしながらも、ぜいたくな暮らしに未練があった。トヨタのクラウン G を運転しながら、1995 年、神戸で教会の牧師を始めた。まさに偽善にほかならない。そんな優柔不断な浅はかさは 9・11 テロの炎上するビルの溶解と共に崩れ落ちていった。ようやく西暦一世紀のパウロのことばが自己の醜悪な欲を焼き尽くすように迫った。「貧しく暮らすすべも、豊かに暮らすすべも知っています。満腹することにも、飢えることにも、有り余ることにも、乏しいことにも、ありとあらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています」と(フィリピ 4:12)。そうして、貧に処する世界観の道に歩み出した。今から 22 年前である。すぐには変身できなかったことは言うまでもない。

神戸国際支縁機構や、「カヨ子基金」は、キリストの精神も受け継ごうとしている。

「それから、イエスは彼らと別れ、都を出てベタニアに行き、そこにお泊まりになった」(マタイ 21:17)。イエスが「お泊まりになった」(ギリシア語 **ἠυλίετο** エウリゼト *ēulizeto*)は「庭で寝る、野宿する」(『セイヤー希英辞典』。ルカ 21:37 参照)が原意である。イエスはホテルなどを利用されなかった。日本の聖書で「野宿をした」と正しく訳出しているものはない。乗り物、宿泊施設、ちゃんとした食事が保障されているなら、出かけてもよいという安全株を願う保障を求めるのが普通であろう。

⁶ イスラムの五柱(五行)と呼ばれる義務に「喜捨(ザカート)」がある。毎年財産の一定額(宗派によって 2.5%から 20%まで幅がある)を貧者に与える行為である。これに加えて、ムスリムはそれぞれ財産や能力に応じて、任意の喜捨(「サダカ」)を行うよう強く推奨されている。『イスラムへの誤解を越えて』(カリード・アブ・エル・ファドル 米谷敬一訳 日本教文社 2008 年 132 頁)。

⁷ 稲穂から脱穀した後、残っている藁で造ったむしろで、寝具、雨具、暖房具にする。

それは「カヨ子基金」の佐々木が『コープ地区だより 11 月号』で記していることから伝わってくる。明日からアスニ渓谷を越えてアトラス山脈の最高峰であるトゥブカル山に挑戦しようとしている。標高は 4167 ㊦である。北アフリカで最も高い山でもある。孤児を探すとはいえ登れるだろうか。筆者は日本では車ばかりの生活である。足がふらついたらどうしようか、と溜息をついた。

b. 「経典の民」

モハメドさんの家族全員は地震被害を受けて、既に被災者の仮住まいであるテント生活が続いている。家族 5 人が 2 ヶ月遊牧民生活を強いられている。それにしても、何世紀もの砂漠、荒れ地、羊、山羊、らくだと生きてきたモロッコ人は石、木材、壁などがなくても平気なようである。長女ハジャール(22 歳)は医療関係に勤務しているが、テントから通っている。筆者らに提供する部屋だけが客人をなんとか泊めることができる。ただし暖房はない。夜のとばりが近づくにつれ急激に温度が下がる。水に手をつけると全身、冷え切ってしまう。夏は冷房がなくても快適だろうが、11 月ともなると暖が必要である。温水が時間をかければ出るのを知らず、冷たいシャワーを浴び、旅の汚れを落とした。身体の震えが止まらない。しかし、エアコン、ストーブ、あんかなどは村にない。日中と夜で寒暖差が激しい。凍ってしまう気温だ。軟弱なことだ。大地震の震源地に近い南西の山間部はさらに気温が低いそうだ。いまさら日本に引き返すこともできない。11 月 7 日(火)午前九州ボランティアから帰神した二人は、その足で関空まで本田寿久理事長に送っていただいた。背後で祈っている仲間たちを考えると、寒さ、空腹、疲労などで溜息をついてはおられない。不思議なことに地球の反対側の日本のメンバーたちが氣を送ってくださっていることがびんびんと伝わる。

地震直後の「X(エックス)」(旧 Twitter)動画参照。

(右の写真 CNN 2023 年 9 月 10 日)



「経典の民」⁸(ユダヤ教、キリスト教、イスラーム教)はここ北アフリカの砂漠であろうと、オアシスである中東であっても共通の父アブラハムを尊崇している。アブラハムの子孫である。「これらの人々はみな、信仰を抱いて死にました。彼らは、約束されたものを受けませんでした。遥かにそれを望み見て歓呼の声をあげ、自分たちが、この世では異邦人であり、旅人にすぎないことを表明しました」(ヘブライ 11:13 『フランシスコ会訳』)と記されているように、「遥かにそれを望み見て」いる異邦人であったことを彷彿させる。

⁸ “学歴、資格、ジェンダーに関係なく、鋏(くわ)を握り、ひたすら何時間も土と格闘します。10 分もたたないうちに汗が噴き出ます。近くにコンビニ、トイレ、休憩場所もありません。だれも文句も言わず、黙々と 10 年近く土に喜びを見出す中に飛び込みました。正直言って、不馴れな土方作業のような農耕に、内心、「これはやっていけないわ」と気が遠くなったこともしばしばです”。

⁹ 旧約聖書である「律法」(トーラー)、「預言書」(ネビイーム)、「諸書」(ケスビーム)を聖典として受け入れる。神「アッラー」は日本ではイスラーム教の神名だと思われている。しかし、実際はアラビア語でユダヤ教・キリスト教・イスラーム教の三宗教に共通の呼称である。東方正教会(アラブ・オーソドックス)のキリスト教徒は神を「アッラー」と唱え、礼拝堂やどこでも祈る。

c. 異邦人とは？ ベルベル人とは？

異邦人¹⁰は古今東西、よそ者であるゆえに、敵対的とみなされてきた。今日のイスラエル国のエルサレムにもアラビア人¹¹、アルメニア人、ユダヤ人、キリスト教徒のそれぞれの区域が設けられている。アハブ王の時代[在位紀元前 871-852]には、ダマスコ(現在のダマスカス)のアラム人、イスラエル人、サマリア人の境界が存在していた(Ⅱ列王 16:7)。

イスラーム教の聖典『コーラン』(正式な名称『聖クルアーン』)はアラビア語で書かれている。アラビア語を話す人々の国を「アラブ」と言う。しかし、トルコ、イラン、アフガニスタン、そしてイスラエルは「アラブ」には含めず、中東に含める。イスラーム世界＝中東ではない。なぜなら世界最大のイスラーム教徒を擁するインドネシアをはじめ、マレーシア、中国の新疆ウイグル¹²などにも多くのムスリム¹³たちが住んでいる。イスラーム教徒人口は約 20 億人である。世界人口の約三分の一を占めるようになる日も近いだろう。

筆者は、ヘブライ語の教師になって 30 年以上になる。ヘブライ語はイスラエルの人々が話す言語である。しかし、正確に言うと、西暦一世紀の時代、イスラエル、つまりユダヤ人が話した言葉は「アラム語」¹⁴(シリア語)である。映画「パッション」¹⁵でイエス・キリストはヘブライ語ではなく、アラム語で話している。アラム語は現在シリア語としてシリアで話されている。シリア滞在、モロッコ滞在中、アラビア語、アラム語と、ヘブライ語は通じる言葉もあった¹⁶。モロッコで、リナ(10 歳)は母親を「ウンム」(アラビア語)と呼んでいた。アラム語では「エーム」であり、似ていたりする。

「私パウロは、あなたがた異邦人のためにキリスト・イエスの囚人となっています」と、パウロは述べた。パウロのように「異邦人」と共生するために「カヨ子基金」は海外へ渡河するようになった。未知のモロッコにやってきたが、はたして孤児の家は建つだろうか、と武者震いした(エペソ 3:1 『リビングバイブル』¹⁷)。私たちは民族、国境、宗教が異なる異邦人であっても、相違を認めつつ、人類＝家族と考えたい。

11 月 10 日、アルジャジーラなどアラビア語系大手メディアで最大の被害県として報じられたアルホズド県(マラケシュ=サフィ地方)に位置する村を目指した。ラシッド・モハメドさんに案内してもらった。モハメドさんから紹介された。4 人の子どもの父親で 40 代、地元で長年ドライバーをしている、見た目は万年青年だ。ラシッドさんとモハメドさんは互いに相手を「親切な人物」と述べ、高く評価し合っている仲である。ラシッドさんはタクシー運転手の経験もある。今は旅行者のためのガイドとして機敏な性格に合う仕事を請け負っておられた。ところが、大地震のために仕事は干上がってし

¹⁰ 「異邦人」はヘブライ語(גֵּר זָר זָר) ザール *zār* <別種の意> ヘブライ語 גּוֹי גּוֹי *gowy*), 「寄留者」(ヘブライ語 גֵּר גֵּר *ger*)ギリシヤ語 ἔθνος *ethnos*¹⁰ *ethnos*, フランス語 *Étranger* エトランジェ)。日本ではエスノスの形容詞形のエスニック料理がある。エスノスは本来「民族」の意であるゆえに、アジアだけでなく、南米、ウクライナやモロッコ料理も含めるべきである。

¹¹ 「アラビア」は基本的にアラビア半島を指している。いわゆるサウジアラビア国の地域である。一方、「アラブ」はアラビア半島を中心にアラビア語を話し、アラブの文化の中で生活している人々のことを指して用いられることが多い。

¹² 2015 年時点のムスリム人口は 2000 万人、新疆のイスラーム教にかかわる職につく人員は 2 万 9300 人である(国務院新聞弁公室刊『新疆的宗教信仰自由状況』2016 年 6 月 早稲田大学名誉教授毛利和子)。

¹³ イスラーム教を信仰しているイスラーム教徒のこと。「ムスリム(Muslim <帰依する者の意>)」はアラビア語である。

¹⁴ ヤコブの義父ラバンは「私の先祖はさすらいのアラム人」(申命記 26:5)。紀元前 539 年にバビロニア帝国を滅ぼしたメディア・ペルシア帝国の公用語はアラム語であった。いわゆる国際語として拡がった。イエスの言語はアラム語であった「アラム」と「シリア」を混同してしまいがちだが、キリストの道に属する者を「シリア人」、「異邦人」を「アラム人」と呼んだりしていた。アラビア語を話す「アラブ」の人々と、シリア語を話す「アラム人」を混交してはならない。

¹⁵ 監督メル・ギブソンによる 2004 年のアメリカ映画。イエスが釘付けにされた時、「ユダヤ人たちの王」という罪状はアラム語でも書かれていた(ヨハネ 19:20)。拙論「第 5 次シリア地震災害ボランティア報告」(2023 年 2 頁)。

¹⁶ 「父」はアラム語で「アブ、アッパ」で、アラビア語と同じ。「立て」はアラム語で「クム、コム」だが、アラビア語でも「クム」(マルコ 5:41)。しかし、ヘブライ語とアラム語が異なるように、耳で聴いた内容だけでは理解できない(創世記 31:47, Ⅱ列王 18:26)。

¹⁷ 『リビングバイブル』は、「キリスト様の奴隷である私パウロは、今、あなたがたのために投獄されています。あなたがた外国人も、神の家族の一員だと告げたからです」(エペソ 3:1)と訳出している。

まったと。ラシッドさんは自身の妹が住む村の近くで被害の大きかったウイルガーヌ(仏 Ouirgane **ويرگان**)の家族に会って欲しいとせがまれた。道路 203 を巧みな運転さばきで被災地へ連れて行ってくださった。ベルベル人の村である。イスラエルの民は「ベルベル人」(ギリシャ語 **βάρβαρος** バルバロスくしゃべっている言葉が“バルバル”と不可解に聞こえるゆえに野蛮人の意 > *barbaros*)と蔑んだ。ヤハヴェを知らない異教徒として距離を置いた(エレミヤ 10:25, I テサロニケ 4:5)。聖書に出ている「異邦人」=「寄留者」と、2001 年の 9・11 テロ以降、神戸国際支縁機構は歩みを共にしてきた。「寄留者」(ヘブライ語 **ゲル** 英語 *temporary, dweller new-comer*)は、難民¹⁸、移住労働者に置き換えることができよう。

日本ではなじみがあまりないベルベル人について紹介したい。

連綿と続いてきたベルベル人

キリスト教の普及に多大な影響を及ぼしたアウグスティヌス[354-430]の母モニカ¹⁹は、ベルベル人であった。現在のモロッコでは、キリスト教の建物を見かけることはまずない。しかし、依然としてベルベル語は広く話され、モロッコ西側に広がるサハラ砂漠、山間部を中心とした場所にベルベル人が住んでいる。今回、モロッコを訪問し、山間部でお会いした方々、子どもたち、地震後の臨時校舎での授業飛び入り参加でも、ベルベル語の存在についてわかった。もちろん『聖クルアーン』はアラビア語で書かれているので、宗教上はアラビア語の地位は確固たるものがある。モロッコ方言の影響を受けた『聖クルアーン』詠唱は、ベルベル語と混ざり合っている印象があった。

いずれにしても、「カヨ子基金」は非言語コミュニケーション:表情や視線、姿勢など「動作で表れるもの」と、声の大きさや話す速度など「言葉を発する際に表れるもの」、また、相手との間にある距離感のように「空間に表れるもの」を大切にしている。だからこそ、どこへ行っても溶け込む。



アスニ小学校の授業で飛び入り教師 2023年11月11日。

西側諸国、「グローバルノース」(北半球を中心とする経済的裕福な国々)とモロッコを比較すると、インフラストラクチャー(*infrastructure* 略称・インフラ)が極端におくれている。しかし、機能、能率、便利を追求した都会生活のように窒息しそうで人間の本性を失うような競争はない。モロッコの山の麓には、人間らしい生活空間と悠久の時間が流れている。

¹⁸ 日本は難民に対する生活支援が不十分。しかも申請をしてから結論が出るまで平均 3 年もかかるため、働かざるを得ない。「就労目的の申請が増えたためではないか」という報道。

¹⁹ モロッコの隣国アルジェリア北東部周辺のスーカラスには、ヌミディア王国のタガステがある。タガステはアウグスティヌスの故郷であり、ベルベル人文化の中心地でもあった。アウグスティヌスの母モニカはキリスト教の分派であるドナトゥス派の熱心な信奉者。モニカはベルベル語であり、アウグスティヌスが生まれた時、「神からの授かりもの」とベルベル語で言った。父親パトリックはキリスト教徒ではない。下級役人(税金を集める職務を負った町会議員)であった。『アウグスティヌス』(ギャリー・ウィルズ 志渡岡理恵訳 岩波書店 2002 年 16-17 頁)、拙稿「アウグスティヌスの生涯と信仰」(KBH 2004 年)。

(3) 孤児たちの呻き

a. 山間部に踏み行く

山間部を走り始めると、電波がところどころ途切れ、電話も通じにくい。ウィルガーヌ地域を境に、北の首都側は被害が小さく、ウィルガーヌが位置するアルホウズ県より南下するほど被害が甚大になる。車窓からの景色も、道路わきの全壊の建物が目に留まる。ラシッドさんによれば、周辺の、山間部の学校には、普段から地元の子どもは通わず、バスに乗り首都圏に行く子どもが多いのだという。首都圏の学校は全寮制で、無償の教育を受けることができる。親元を離れ生活する子どもたちは、長期休みや祝日ごとに帰省する。ただし、無償の教育制度において、教科書代などは有料である。

山間部は、都市部と異なり明かりが落ちるのが早く、就寝も早い。夜に発災した地震では、損壊家屋の下敷きになるなどの山間部の犠牲者が多くあった。



ウィルガーヌダム 2023年11月11日

巨大なダムが目に入った。ウィルガーヌには、モロッコに数十基備えられているダムの一つによって、大きな湖ができてあがっている。ところが、モロッコ全体からすればいくつもあるダムの一つに過ぎない。9年前ほどに建設された。アトラス山脈ふもとの湖において、生態環境の生態系をこわした張本人である。村人は魚料理も好む。ダム近辺の魚は天然ではなく別の場所から稚魚を持ち込み養殖している。ウィルガーヌダム建設の目的は都市マラケシュへの電力供給である。他国と同様、便利な生活と引き換えに自然を売り渡した贖罪は将来しつぺ返しを受けることだろう。かつて湖があった場所の「村人は追い出された」と寂しげに語る住民がいた(11月10日地元住民談)。

ダムなどの技術社会的な問題構造は横たわるが、モロッコにおいて、動物や人間、植物といった生き物の多様性だけでなく、宗教の多様性もうかがうことができる。ラシッドさんがウィルガーヌの山頂から説明してくれた。赤茶色の土と同じような色をした四角い家々が立ち並ぶ中で、白色をした家が集中している箇所があった。「あそこに白い家が見えるでしょう。あそこはユダヤ教徒の所有している家。いまは誰もいない。年に一度のお祭りの時期に、居住者がやってくる。そうすると、ここら一带はにぎわうんだ」。経済的にも効果をもたらした、ユダヤ教徒と現地のイスラーム教徒の間に争いやいさかいはないという。ラシッドさんに、現在起きているイスラエル・ハマス間の戦争につ

いて尋ねた。彼はどちらの側にも同情を示した。そのうえで、「争いはよくない」と非戦の立場を取った。彼はモスクでしか教育を受けず、小中高を卒業していない民衆の一人だ。旅行をしながら英語を身につけ、そのほかフランス語も理解する。そのうえで道徳的にも、高いモラルと智慧が、ラシッドさんの言葉の端々から感じられた。

b. 凄惨な傷跡

人工的に造られた美しいウィルガーヌダムと対照的な光景が広がる。

両親が大地震と共に埋もれたままだと嘆息するアブデプクビン・アイト・ビドウさん(35歳)は深夜、なんとか二階が一階に押しつぶされた自宅から脱出した。しかし、父親は見つからなかった。母もわからない。ダムがよく見える。



アブデプクビン・アイト・ビドウさん

山間部の民間住宅に差し掛かった。比較的大きな村、イルブールである。がれきばかりでどこが道で住居だったのか区別がつかない。村に入ったら来た道に戻れるか不安である。路地のそこかしこに全壊から半壊の家々ばかりである。一見、なんの影響もなさそうな建物らしきを見つけた。すると、向かいの露店を営んでいるロックマンさんが息子と一緒に話してくれた。「300世帯がここには住んでいたんだ。38人が死んだよ」と。「ここ1階があったんだ」と住んでいた自慢の3階建ての建物を示した。1階はきれいに押しつぶされていた。息子のイルブールさん(13歳)とタハさん(9歳)もよほどこわかったのか自分たちの住んでいた場所を恐る恐る見つめた。1階のように見える2階の部屋に寝ているような。「一命をとりとめたことだけでも感謝せんと」と、フランス語で言う父親の言葉も心なしか細かった。隣りの別の露店は建物だったとは思えない残骸に変貌していた。



ロックマンさんと二人の息子 ウィルガーヌ



たった一軒、わずかな食べ物を売っている露店に、松葉杖をつきながら男性がやって来た。購入した卵を片手にぶら下げている。ロックマンさんと何かを欲しがるともなく、村には何人いたのかなど、恐怖体験を分かち合っていた。村で一度も話したことがない人でも震災は距離をなくして戦友のような間柄にしていた。アブデル＝カビール・アイツアレムさん(31)と言う。地震で入院する羽目になった。1週間ほど前に退院したばかりだった。歩けなくなった足をひきずっておられた。災害前は道路工事に携わる仕事をしていたが、障害を抱え、もはや就労はできない。アブデルさんは自分の家に来るように私たちに勧めた。

ほんの数分のところだったが、道のない坂をつまづかないように気をつけて上った。爆弾でも落ちたのかと思うほど、見渡す限り、家々は壊滅的であった。がれきの地平線が見渡せた。散乱した家々の屋根、壁、日用品と混ざり合った損壊のかけら。そして腐臭である。屋根と思しきところを歩いている、否、よじのぼっているかわからない。平らな場所はない。名アルピニストでもこんな厳しい山は登攀したことがないだろうに。



「ここに自分の部屋があったんだ」と、その一部を指さしてアブデル＝カビールさんは述べた。兄弟姉妹の家族みんなで住み、6世帯で暮らしていたという。アブデル＝カビールさんの両親もいた。そのうち、アブデル＝カビールさんの両親、兄弟姉妹、その娘、息子にあたる、姪、おいなど、合わせて8名の家族を一度に失った。



家族、仕事、家などすべてを一度に亡くしたアブデル=カビールさん

アブデル=カビールさんが寝泊まりする仮設には、同じ境遇の人たちがいるとお聞きした。案内してもらった。孤児との出会いにつながる。

c. 「カヨコ・チルドレン・ホーム」への糸口

仮設テントが並ぶ。7歳の一人息子を亡くしたハビバ・アイツアレムさん(25歳)たちにお会いした。ハビバさんから直接事情を聞くと、自然と私たちは涙がこぼれた。すると言葉によらず、その涙が彼女たちと共有する契機になった。みなさん集まってきた。「だいじょうぶだから」と逆に慰められた。ハビバさんは筆者らの肩をなで、なだめながら、自身も涙がこぼれてくるのを拭っていた。つられて周りの人たちも目頭を拭った。胸襟を開き合った。筆者らがボランティアをしていることを話すと、そんな人たちがはるか遠くの日本からわざわざ来ていることに目を見はっていた。ベルベル人には私たちがみ使いであるかのように思えたのだろう。

ハビバさんは自分の兄弟姉妹の子どもたちについても話された。「保護者が盲目で、目が見えない」、「旦那さんが亡くなり、3人の子どもたちが残された」、「仕事もなく、収入がない」など、よく生きていると思えるほどの逆境にある親族や、仮設テント住まいの人たちについて語ってくださった。シングルマザー、孤児たちがここにもいることを知った。日本を出て、4日目である。

ハビバさんは自分の子どもを失った試練を乗り越えるために、孤児の世話をしてもよいと気持ちを言い表してくださった。周囲の母親たちも「私たちも何かできるかしら」と好意的な空気に包まれた。



筆者の左がハビバさん。2023年11月11日

孤児たちのお世話する方を見つけるために災害地へ迅速に向かうように「カヨ子基金」はしてきた。モロッコでは奇跡的に即決であるかのように無料で孤児たちを世話するハビバさんがみつかった。日本の里親から毎月一人につき3千円が渡されるとはいえ、炊事、着替え、洗濯など孤児

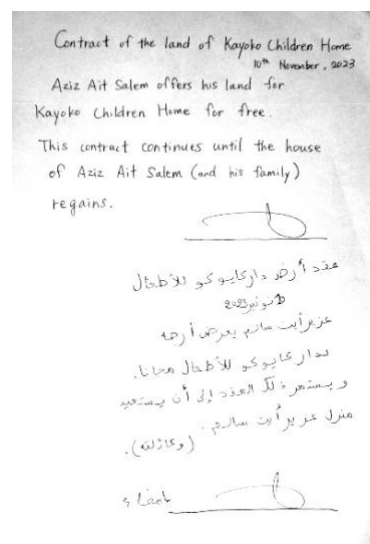
たちの生活の世話をするのは容易ではない。しかし、ハビバさんのようなボランティア精神がある方と出会えたことは感謝である。

ネパール、バヌアツ、ガーナなどでも、「カヨコ・チルドレン・ホーム」の最大の課題は、現地で孤児の共同ホームの土地と提供して下さる方がいるかどうか、いつも試金石になっている。

アジスさんという土地の所有者に携帯で懇願した。すると孤児たちのためなら、無償で土地を貸すという返事があった。避難している場所の裏手に、敷地があるらしく案内してもらった。100m×200m ほど広さである。その日のうちに、土地を契約するために、アジスさんが仕事を調節して車でやってきてくださった。3年ごとの更新である。成立した。



「カヨコ・チルドレン・ホーム」の土地の契約書 左がアジスさん



そこに日本からの「カヨコ・チルドレン・ホーム」建設基金 100 万円が用いられる。

イマーム(イスラーム教の聖職者)のハッサムさんもバスを乗り継いでやって来た。ご自分のモスクは地震で全壊である。しかし、アッラーのご加護により、「カヨコ・チルドレン・ホーム」ができるという祝福にじっとしておれなかったようだ。モロッコへのボランティアを賛同して下さった日本のみなさんの応援のおかげと感謝している。



中央がイマームさん。喜び合う仮設テントの家族。2023年11月11日

け

< 結論 >

晩、9 時頃、寝泊まりをしていた場所に、親しくなった子どもたちがやってきた。10 歳のリナが英語で「Miwa, come on」と言う。何事が起きたのか、と心配しつつついていく。暗い路地にろうそくの光が輝いているように見えた。なんと結婚式ではないか。ベールを被って顔が見えない新婦らしき女性を取り囲んでいる。暗闇の路地を花嫁と近所の少女たちの一行が上ってきた中に加わった。

新約聖書に出てくるような、油を絶やさないように警告した花嫁のたとえ話²⁰の世界に思えた。暗い路地で明かりを手を持っている。男性はいない。幼い少女たち、女性たち 40 人くらいがベルベル語の同じ歌詞を復唱しながら行進している。坂を上へ上へとのぼっていく。花嫁と共に会場に着いた。夜だから、個人の家なのか、集会所なのか、わからない。地震で人が集まるような場所などはないと思っていた。花婿の家だろうか。ただ仲良くなった小学校の少女達の案内されるままに来たので、どこにいるのか、何をするのか、わからない。「そうして、先に走って、女たちにも男たちにも吉報をつたえてまわりました。すると市民たちは手にドゥッフやミズマールをもち、ピーヒャラピーヒャラドンガドガドと迎えに出てまいりました」と描写する「アランビアン・ナイト」²¹の世界である。

会場では年配の女性が歌い始めた。アンダルス音楽²²である。歌は年長者から受け継がれていくのだろう。少女や周りの女性たちがしばらくして歌に合わせて声を加えていく。新しい歌を主に歌うが如く、結婚を祝う歌が繰り返され歌われていた。「アジュール」(ベルベル語で「こんにちは」)で筆者に向かって、まるで新しく家族になったかのごとく、会場の真ん中で踊って歌うように、周りの女性たちが手を引いた。震災で壊れた楽器を用いて、昔ながらの一斗缶に相当するポリタンクを楽器にして打ち鳴らす。旧約聖書に描かれているように、みんなが喜び跳ね踊る²³。

動画をご覧ください。 <https://youtu.be/W4YDIOGCM7E>

「彼らは子らを群れのように連れ出し 子どもたちは舞い踊る(רָקְדוּラカード <「跳ぶ」の意> *raqad*)。彼らはタンバリンや琴に合わせて歌い 笛の音に歓喜する。彼らはその一生を幸せに過ごし 平穩に陰府に下る」(ヨブ 21:11-13)。

「カヨ子基金」は孤児たち(ヘブライ語 יָתוּם *yathowm*)を世話する。見知らぬ異邦人(גֵּר *ger*)を家族として迎える。シングルマザー(אַלְמָנָה *almanah*)を見守る²⁴。

温かいベルベルの方々、聖書を実践している。「ですから、あなたがたは、もはやよそ者でも異邦人[寄留者]でもなく、聖なる者たちと同じ民であり、神の家族の一員です」(エフェソス 2:19)。モロッコからの帰途、その後も、ハビバさんからの連絡、そのほか筆者らを泊めてくださったモハメドさん家族からの連絡を頻繁に受け取った。「だいじょうぶか」、「無事に出国できたのか」。まるで実家から心配されているようだった。

家族の 8 名を一度に亡くしたベルベル人の孤児、カヨ子・チルドレン・ホームを建てられるように、力をお貸しください。

²⁰ マタイの福音書 25 章 1-13 節。

²¹ 『アランビアン・ナイト 1』百四十二夜 (前嶋信次訳 平凡社・東洋文庫 1998 年)。

²² アンダルス音楽は、中世スペインのアンダルシア地方を席卷していたイスラーム社会で熟成した。口頭伝承の古典芸術音楽のことである。北アフリカ、中東では「ヌーバ」(組歌)として知られている。イスラームのアッバース朝(現在のイラク)の都バグダードは、唐の都西安と並んで世界最高水準の文化であった。8 世紀、9 世紀当時、スペインのキリスト教もまだ医学、芸術、科学は劣っていた。イスラーム文化がアンダルシア地方の中心となり、歌舞音曲が日夜絢爛豪華にくりひろげられていた。モロッコの王ハサン 2 世(在位 1961-1999)が 1999 年に亡くなった時、ラジオは終日、アンダルス音楽を流し続けた。

²³ ヨブ 21:11, 詩編 114:4,6。

²⁴ 「孤児たちに対しては父親のようになり、孤児たちの母親に対しては、その夫がするように手助けするがよい。そうすれば、いと高き方はお前を子と見なし、母親以上にお前を愛してくださる」(シラ 4:10)。